

2021/02/22
日本学術会議若手アカデミー

若手アカデミー意見概要

1 学術会議の活動について——科学的助言を行う機関としての役割と提言等のあり方

(1) 科学的助言を行う機関としての役割

・科学的助言機能と情報発信力の強化が急務である。今般の事態では、政府・社会への発信力の強化に加えて、学術会議に属さない研究者を含めたアカデミア全体への発信も重要であることが明らかになった。

・独立した組織であることを活かして、メディアの科学担当にいち早く有識者を紹介し、科学的に正しい情報を流すシステムであるサイエンスメディアセンターを学術会議の組織の一部として置くべきではないか。このような形でメディアと継続的に信頼関係を築き、専門的知見を提供するには、特定の組織等と利害関係のない継続した資金および博士号取得者等の専門的知見を有するチームが必要になる。

・国際的な活動は、現状、学術会議でなければ担えないものや代表性が認識されにくいものもあり、コアとなるミッションとして強化が必要ではないか。

(2) 提言等のあり方

・提言の公表後、社会において効果的に活かすための工夫等が必要となるが、そうしたフォローアップが十分ではないことがあるのは否定できない。また、多方面への配慮等から読みづらくなる一方、立法府・行政という受け手の抱える課題を十分に考慮できていない場合、一方的な要求に映りかねないという問題もある。

・提言は一つの結論の決め打ちではなく、複数の選択肢の提示という形をとるべき場面も考えられる。特に、価値判断が分かれる問題については、複数の価値判断の位置付けやそれらの具体的な帰結を説明するといった配慮が必要になることもある。

2 予算・事務局等について

・発信力と継続性を担保するには、予算と事務局機能の強化が必須である。

・予算利用に柔軟性が無く、先例の無いことを行うことも難しいなど、活動しにくい部分がある。押印廃止等の効率化も必要である。

・博士号取得者や博士課程の大学院生の活用というアイデアもあるところ、研究内容やアカデミアの状況を理解している学術会議専属スタッフとして博士号取得者等を採用するのは十分に考えられる。他方、事務作業を行う立場として任用することや、本来必要な研究者ポストの代替として使うのは望ましくない。

3 若手アカデミーについて

・若手研究者が分野を超えて議論し、アカデミアの課題について認識を共有できる点で極めてユニークな場となっている。こうしたネットワークは、将来日本にとって大きな財産となる。

・他国の若手アカデミーではシニアとの分断が生じがちなのに対して、日本ではそうではない。このような関係も含めて、若手アカデミーの活動に積極的な支援をお願いしたい。

・若手アカデミーは学術会議全体で行うことの実験の場にもなり得る。リソースが足りないことが多いが、スモールスタートで試すのであれば可能となる。

・行政・政治との関係でも、まずは若手同士でつながっていけないかと考えている。

4 会員・連携会員の選考および多様性

- ・選考プロセスは若手アカデミー会員からみても、透明性の向上が必要な部分がある。学術会議外も含めたアカデミア内部の理解も意識する必要があるのではないか。
- ・特に会員については、人数をあまり絞りすぎると、分野代表性の維持が難しくなる。
- ・若手を大幅に増員するのは困難であり、必要性も低い。
- ・産業界等の所属者を増やすのは多様性の点では望ましい。ただし、所属先によっては、加入してもらえるか（特に民間企業）、個人として十分に活動できるかといった問題がある。企業等のニーズを知る必要があるのではないか。
- ・海外の研究機関等に所属する日本人研究者のメンバーを増やす必要があるのではないか。

5 学術会議の改革および「学術会議問題」への対処等について

- ・政府・政治から求められて学術会議が改革をするというのは、事実経過としては否定できないが、改革のきっかけとして捉えて、主体的・自主的な改革を通じて国民や研究者からの支持につなげることが建設的である。
- ・改革をするのであれば、なぜするのか、目標は何か、独立性の維持に必要な最低限の要素は何かを明確に示す必要がある。